

「壁画ナビゲーション」・ 「名品ナビゲーション」の公開

飛鳥資料館・平城宮跡資料館では、2014年8月より、文化財の高精細画像を大型タッチパネルモニターで自由に拡大・縮小して観賞できるナビゲーション・システムを導入しました。このシステムを用いて、様々な文化財の細かい部分を観察することができます。

飛鳥資料館の「壁画ナビゲーション」は、高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の高精細画像を鑑賞できます。壁画を拡大すると、細かい模様や下書きの跡等を観察でき、様々な発見があります。石室内で撮影した画像と、石室から取り出した後の画像を比較すれば、湿度による色味の違い等もわかります。また、赤外線画像では壁画の輪郭を描いた墨線がより見やすくなり、壁画の描き方の特徴を知ることができます。

平城宮跡資料館では、高松塚古墳・キトラ古墳壁画の高精細画像にくわえて、企画展・特別展で出品された資料の中から、ぜひ細部まで注目していただきたいものを選びすぐって紹介しています。

例えば、今年度の夏期企画展「平城京ビックリはくらんかい—奈良の都のナンバーワン—」からは、直径2.2cmの巻物の軸頭に、18文字が非常に細かく丁寧に書かれた「最小文字の木簡」等を取り上げており、普段は間近で見られない部分までじっくりと鑑賞することができます。今後も企画展・特別展ごとに資料を追加・更新し、充実させていく予定です。

両館とも来館者の方々にはたいへん好評いただいています。この機会に、ぜひ飛鳥資料館・平城宮跡資料館にお越しいただき、ナビゲーション・システムをお楽しみください。

(企画調整部 丹羽 崇史・中村 玲)



飛鳥資料館の「壁画ナビゲーション」

日韓発掘交流に参加して

韓国国立文化財研究所との研究交流の一環として、2014年8月18日から10月2日まで、国立慶州文化財研究所に滞在し、5世紀の新羅支配者層の墓域であるチョクセム古墳群、統一新羅時代の東宮跡と推定される新羅王京遺跡の発掘調査に参加しました。

チョクセム古墳群は、2007年から国立慶州文化財研究所が調査を継続してきており、^{つみいしもつかふん}積石木槨墳とよばれる新羅特有の墳墓が一面に広がります。その中でもやや規模の大きい44号墳(直径約30m、高さ4m)は、現在「チョクセム遺跡発掘館」と名付けられたドーム状の施設で覆われており、内部で発掘調査が進められています。「発掘館」では、発掘現場自体が博物館のように、常時市民に公開されており、誰でも自由に調査の様子を見学できます。韓国でも初めての試みとのことで、今後、発掘調査の公開手法のモデルケースになるものと思われます。

続いて参加した新羅王京遺跡では、精緻に加工された石材で飾られた基壇、礎石やそれを据え付けた穴が所狭しと検出されており、遺構の密集度と遺存状況の良さに感動を覚えました。また、藤原宮や平城宮との規模や構造の違いを感じながらの調査は、とても有意義なものでした。自らの手で韓国の遺跡の土や石に触れることができ、遺構の構造や調査方法をめぐって意見を交わすことできた点でも、大きな収穫が得られました。

日韓発掘交流は今年度で9年目を迎えました。この間、奈良文化財研究所と国立慶州文化財研究所との間で築かれてきた絆の深さを滞在中の様々な場面で実感できました。今後もこの発掘交流がさらなる発展を遂げることを期待しています。

(都城発掘調査部 廣瀬 覚)



新羅王京遺跡での発掘調査風景